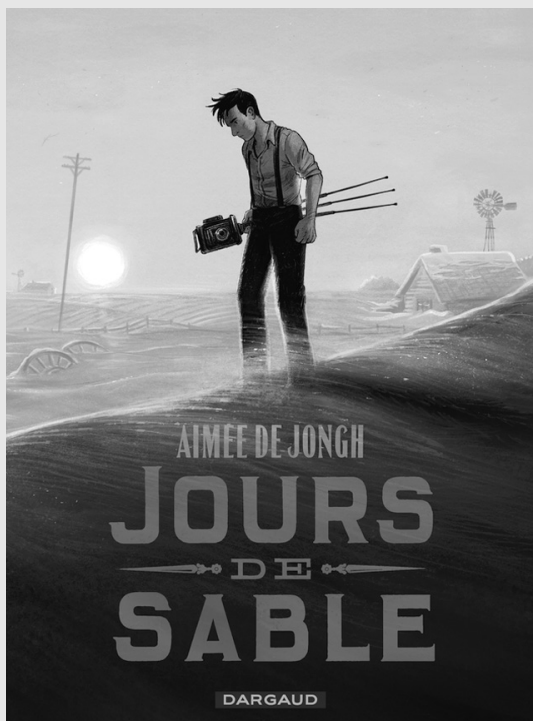


文化としての漫画 国境を越えた表現との出会い

— 日本国際漫画賞二五回の歩みを振り返る



最優秀作品 [Days of sand (砂の日々)]

エメー・デ・ヨング (Aimée de Jongh)

アメリカ合衆国、1937 年。大恐慌の最中、22 歳の報道写真家ジョン・クラークは、中央南部の Dust Bowl の悲惨な状況、農民の苦しみを世論に訴える写真を撮るため派遣される。しかし、写真を撮れば撮るほど、ジョンは住民の苦境を目の当たりすることになり、自分自身の役割についても疑問を持つようになる。実在の人物の話を基にした勇気あるドキュメント。©2021 AIMEE DE JONGH - DARGAUD BENELUX (Dargaud Lombard s.a.)



マンガ家

里中満智子

さとなか まちこ 1948 年大阪生まれ。64 年高校 2 年生の時に『ピアの肖像』で第 1 回講談社新人漫画賞受賞、プロデビューを果たす。現在まで 500 タイトル以上の作品を発表。2006 年に全作品および文化活動に対して文部科学大臣賞を受賞。代表作に『アリエスの乙女たち』『あすなろ坂』『海のオーロラ』など。歴史を扱った作品も多く、『天上の虹』『長屋王残照記』『マンガギリシャ神話』などがある。大阪芸術大学キャラクター造形学科学科長・教授、日本漫画家協会理事長も務める。

日本のポップカルチャーを代表する

コンテンツとして世界的に評価の高い漫画。

その漫画を通じて文化外交を展開すべく、

二五年前に創設された日本国際漫画賞。

漫画界の重鎮で、創設から関わった里中満智子氏が、

その意義とこれからの展望を語る。

——二〇〇七年に国際漫画賞が創設され（一六年度から日本国際漫画賞に改称）、二一年度は第一五回という節目の年を迎えました。里中さんは創設当初から審査員を務められています。

里中 二〇〇六年に当時の麻生太郎外務大臣が、「日本に国際漫画賞をつくりたい！」と宣言されたことが始まりです。でもどうやって進めるのかはまったく手探りで、外務省の事務方の皆さんはたいへん戸惑っていました。そのような状況で外務省の担当者が私のところに相談に見えたので、どうなることかと不安もありましたが、海外に日本の漫画文化を普及させる良い機会になると思い、審査員を引き受けました。募集の方法、審査の基準、審査員の人選な

日本国際漫画賞

二〇〇七年に麻生太郎外務大臣（当時）が、日本の文化外交の二環として「今や世界各国に現れつつある若き漫画の旗手たちに、漫画の本来本元である日本から、権威のある賞いわば漫画のノーベル賞のようなものをあげたい」との思いから創設。海外の漫画家の応募作品の中から、最優秀賞二作品、優秀賞三作品を表彰。受賞者を一〇日間程度招聘し、日本の漫画家との懇談や関連団体訪問の機会を提供する。

ど、一から立ち上げの準備を進めていったことを、よく覚えています。それから、予算もなくて苦労しました（笑）。

——日本の漫画に世界が注目し始めていました。

里中 世界を見渡せば、それまでコミックと言えば、完全な分業制で制作され、書き手が代わっても安定的に提供され続けるアメリカン・コミックに加え、主としてフランス語圏において絵画にセリフがついたようなバンド・デシネが代表的でした。しかし日本の漫画はそれらと異なり、一人の作家があらゆるジャンルやテーマを扱い、ストーリー、場面構成、キャラクター作りなど、実に自由で多様な発想で展開させる。このように独自の発展を遂げたジャパニーズ・コミックが次第に世界から注目され、いつの間にか世

界の漫画先進国になっていたわけです。したがって、漫画に親しんでいる世界のクリエイターたちの作品を日本が顕彰することは、日本の文化外交の一環としてたいへん意味があると思います。

——審査にはご苦労が多いと思います。

里中 最初のうちは作品の現物またはコピーを郵送してもらい、必要があり、広報や応募に関しては、各国にある日本の大使館・総領事館や国際交流基金の皆さんに協力していただきました。おかげで第一回は二六の国・地域から一四六の応募作品がありました。

このときは本当にバタバタで、第一次審査として私がすべての作品の下読みをしました。外国語がわかりませんので、外務省に直訳でいいので翻訳をお願いしたかったのですが、この段階では時間も人員も割けないとのことだったので、やむを得ず原文のまま目を通しました。ストーリーを読み切ることではできませんが、コマの流れ、キャラクターの表現、絵のセンスなどから、作品の良し悪しはある程度はわかります。勇気を出して十数点を最終候補に残し、それらはすべて入選としたうえで、他の審査員のお力も借りて、最優秀賞一作品、優秀賞三作品を選びました。これだけ苦労したのだから外務大臣にはぜひ表彰式にご出席いた

だきたいとお願いしました。麻生大臣はちゃんと出てくれました。以降も歴代大臣は表彰式に出席されています。受賞者は一〇日間ほど日本に招聘し、日本の漫画家や関連団体との交流を持ちました。現在はコロナ禍で受賞者とオンラインでお話するだけです。収束したらぜひ日本にお越しいただきたいですね。

世界の若者の苦悩を多様に描き出す

——日本国際漫画賞の認知度は次第に高まってきました。

里中 翌年の第二回は四六の国・地域から三六八作品の応募がありました。その後も年によって凸凹はありますが、今年度の第一五回は七六の国・地域から四八四の応募作品が届きました。

嬉しいのは、受賞者はもちろん、最終選考に残られた方々もたいへん喜んでくれたことです。それぞれの地元で入選がニュースとして取り上げられたり、政府から表彰されるようなことも少なくないようです。漫画という日本で独自に進化した若い文化が、一つの表現形式として当たり前のようにグローバルに認められていることを再認識し、感激しました。

麻生大臣はこの賞を「漫画のノーベル賞」にしたいと考

えておりましたが、日本が優れた応募作品にある種の「お墨付き」を与えられるのは、漫画という日本文化が、国の後押しではなく、自然発生的に世界から求められて、浸透していったからです。日本で作品が評価されることは、受賞者のキャリアにとっても素晴らしい意味を持ちます。その点で日本国際漫画賞は、賞そのものの意義はもちろん、費用対効果の面でもよい事業ではないかと思います。

——昨年一二月に、第一五回の受賞作品が発表されました。

里中 最優秀作品は、オランダのエメ・デ・ヨング(Aimée de Jongh)さんの「Days of sand(砂の日々)」、優秀作品は、ウクライナのナタリヤ・レレキナ(Natalia Rerikina)さん・ギルベルト・ブリッセン(Gilbert Brissen)さんの「Moonchosen(月に選ばれし娘)」、スペインのジョルディ・ラフェーブル(Jordi Lafebre)さんの「Always never(それでも、やっぱり)」、台湾の顆粒(コリー)さん・逢時(フェンシー)さんの「Cliniclowns: last goodbye(クリニクラウン—『またね』を最後にもう一度)」です。最優秀賞

となった「砂の日々」は、優れた構成力と巧みな心情描写を中心とした完成度の高さが評価されました。いずれも外務省ホームページ「日本国際漫画賞」のサイトから一部が閲覧できる予定です。

——一五年間見てこられて、作品の変化などをお感じになりますか。

里中 比較的若い世代からの応募が大半ですが、応募者の文化的・社会的背景を強く感じさせる作品もある一方、日本の高校生や若者を主人公にした青春ドラマも少なくありません。時代物もあります。考えてみれば、日本の少女漫画も昔からパリやニューヨークを舞台にしてきました。別に生活経験があるわけではなく、本や映画を見てわかった気になって描くわけで、海外旅行が一般的になってきたら、みんな「確認」する気持ちで外国に出かけたものです。パリのカフェが先払いなこと、改札口のない駅が主流など、私も後から知りました(笑)。その点で現在はインターネットの時代であり、海外にあっても日本の情報が実に丁寧に描かれていることに驚きます。

少し脱線しましたが、私が応募作品を読んで感じるのは、作品の舞台がどこであれ、そこに描かれる(多くの場合は)若者たちの苦悩——学校での友人関係、家族との関係、恋愛、仕事や将来への悩みなどは、本質的なところではより共通していると感じます。大人から見れば、「そんなことで悩むなよ」と思うようなことも、まだ世界が狭いがゆえに苦しみ、心を閉ざす人たちの姿は、悲しいほどに

世界共通です。反対に、人と人とのつながり、絆の大切さも変わらない。それに対する人間の共感や喜怒哀楽を表現するのが文化・芸術であるわけですが、中でも漫画はとにかく自由で、作者の個性と考え方がストレートに反映されるドラマ表現です。映画や演劇のようなセットやメイクは不要で、作者は自分が描きたい世界を、いちばん表現しやすいシチュエーションとキャラクターで描く。読者としては、そこに入り込めるかどうかだけ。だから私は審査していても国の違いや時代による変化はそれほど感じません。

受賞作からベストセラーを

——コロナ禍の影響はありましたか。

里中 応募の形態には大きな変化がありました。コロナ禍を受けて、二〇二〇年からオンラインでの応募が可能になり、それがいつそう進みました。挑戦したい人たちにとっては、アクセスしやすくなったのではないかと思います。応募状況としては、それほど大きな変化はありません。作品を描く／読むという行為は基本的に一人でできますし、制作・配信のオンライン化が進んでいる状況であればなおさらです。

応募作品の内容に関しては、本質的な影響が現れるのは

これからでしょう。この時期に青春期・思春期を送っている子どもたちが大人になってみないと、本当のところはわからないと思います。

——日本国際漫画賞の今後への期待をお聞かせください。

里中 バスケットボールや野球に打ち込む若者がアメリカのプロリーグを目指すように、日本で漫画の仕事を持つことが一流の証となり、世界のクリエイターの夢となるような状況ができれば嬉しいし、日本国際漫画賞がそのための登竜門のようになれば、こんな素晴らしいことはありません。そのためには、受賞作品の中から日本で出版され、ベストセラーとなる作品が出てほしいのですが、残念ながらまだ実現していません。個々の作品でデジタル配信されたものもありますが、ある程度のボリュームがないと目立ちません。その意味では、「日本国際漫画賞受賞作」という一つの塊にしてプロモーションするなど、さまざまな流通・販売の可能性を模索してゆく必要があると思います。出版社の編集者に審査に加わっていただいているのは、実はそのような狙いもあります。経済的なインセンティブが前面に出過ぎるのはよくないにしても、確実にモチベーションにはなりますし、今後の方向性の一つとして考えているところです。●